

「どうぞ」

魔王城に戻るとバルバトスはさっそく伊吹のために花のお茶を作ってくれた。
一口飲むとほわっと甘い味が口の中に広がる。

「・・・お砂糖入れた？」

「いいえ。全く入れていませんよ？」

「え・・・？じゃあこの甘い味って・・・」

伊吹が戸惑っているのを見てバルバトスにはこりと微笑んだ。

「面白いでしょう？これが先程収穫した花の味なんです？匂いは全然甘くないのに甘い味です」

「本当・・・ほのかにだけ甘い味がする・・・」

「花の蜜がこのように匂いになると聞いたことがあります、煮詰めるともっと甘い味になるんです」

「そうなんだ・・・この花本当に面白いんだね」

「ええ。後面白いのは花だけじゃないんですよ」

「え？」

そう言うとバルバトスは伊吹の目の前にあるクッキーを指さした。

「この花は葉に胃を健康にする効果があるんです」

「え？じゃあハーブと同じなんだ」

「そうですね、人間界のハーブと似たような効果があり昔は胃薬として使用されていたそうです。その葉をクッキーにしました。どうぞ召し上がれ」

「ありがとうございます！」

クッキーを一口食べると優しい甘みとミントのような爽快感が口の中に広がった。

「美味しい！やっぱりバルバトスの作るお菓子は最高！」

二人はたわいもないおしゃべりをしながらお茶とクッキーを楽しんだ。

そしてその間伊吹の手は次から次へとクッキーに伸び、一時間ほどすると無くなっちゃった。

「あー、やっぱりバルバトスが作ったお菓子はつい食べ過ぎちゃうー最近ダイエット頑張らなきゃいけないのに！」

「え？今のままで十分だと思いますが？」

「そうでもないの。アスモデウスがいるでしょ？美容に関して凄いかちよつとでも太るとすぐダイエットして！ってうるさいのよ。この間なんか二人でカフェ行ってジャンポパフェを頼もうとしたら、後キ口はやせなきゃダメ。って言うんだよ？もー本当最悪！」

「結局何を頼んだんですか？」

「コーヒーゼリー。だってアスモデウスと来たらそれしか認めてくれないんだもん。紅茶にお砂糖を入れるのだからだめって・・・あれ？」

「どうしましたか？」

伊吹は軽いめまいを覚えたが、そのめまいはすぐにおさまった。

「なんでもない・・・貧血かな・・・？」

「貧血？それはいけませんね」

「最近野菜ばかりだからダメなのかな？明日レバーでも・・・う！」

まためまいが起きた。今度は先程のものより強い。

「なんだろうこれ・・・なんか凄く・・・くらくらする・・・」

「いけませんね。私のベッドで少し休んで下さい」

「ありがとうございます。バルバトス」

伊吹はバルバトスの肩を借りるとベッドに横になった。

(うわーなんだろこれ？吐き気はしないけどなんだか気持ちが悪いくらいし．．．くらくら．．．あれ？)

伊吹は自分の体が妙におずおずするのを感じていた。

「うー」

「どうしましたか？」

「分かんない．．．体が．．．体が妙におずおずする．．．」

おずおずした感じを押さえようと体を動かすと今度は妙にくねるような動きになる。

「バルバトス．．．なんか変だよ．．．なんか凄く変だよお．．．」

「効果が現れてきましたね」

「え？」

バルバトスは服を脱ぎながら説明を始めた。

「あの花の葉が胃薬になるというのはウソです。

実は強い催淫効果があるんです」

「催淫って．．．え？それっていわゆる媚薬！？」

「正解」

バルバトスは伊吹の体の上に馬乗りになると衣服を脱がせ始めた。